

東京に「なまらいい」交流会

道産子ら飲んで学んで… 日ハム応援にも力

今夏に道内会合

東京都内に「なまらいいでない会」という首都圏在住の道産子らでつくる交流会がある。昨年5月に発足し、3カ月に1回のペースで毎回70〜80人が参加している。2年目に入る今年度は、北海道の歴史と文化を学ぶ勉強会や、プロ野球北海道日本ハムの応援にも力を入れ、夏には初めて道内で会合を開く。

2月15日夕、東京・銀座。4回目の会合は一風変わった乾杯が始まった。「なまら〜」と声を上げたのは、高倉健や石原裕次郎の作品で知られる旭川出身の写真家武藤清次さん(80)。参加者70人が「いいでないかい！」と唱和した。

参加資格は、道内出身者に限らず、道内勤務の経験者、道内の学校の卒業生、道内を旅した人など。「北海道が好き」というだけの人も参加できる。

会長の真柄秀明さん(63)は、檜山管内せたな町出身で、信用調査会社東京商工リサーチ元社長。「ゆるい共通点だけでつながれる場をつくりたかった」と言い、自らの人脈や口コミで会員数は膨らんでいった。

首都圏で盛んな市町村単位のふるさと会と違い、出身地は問わない。年齢も20〜80代と幅広く、会社役員、

若手社員、大学教授と職業や肩書もさまざま。会話のテーマはもっぱら「北海道のなまらいいところ」について。

オホーツク管内清里町出身で元防衛省職員の出崎秀夫さん(67)は「北海道は広く、出身地ごとに言葉や文化が違う。みんなの古里自慢を聞くのが楽しみ」。大手化学メーカーの総務部長小島昌尚さん(57)は函館出身だが、父の転勤で幼少から道内外を転々としており、「故郷を見つづけるために来ている」と言う。

7月には函館市と、北海道新幹線が開業した北斗市を訪れて会合を開き、道南

の歴史にも触れる。また都内では、お酒を飲んで交流するだけでなく、参加者が持ち回りで講師を務め、酪農やアイヌ文化に関する勉強会を始めた。考えた。

5月は東京ドームで日本ハムの試合を観戦し、千葉県鎌ケ谷市で2軍の試合も見ると。会員で、日本ハム球団首都圏事業部の川崎裕子さん(61)は「新潟県出身は北海道好きの人たちが、結果して応援してくれるのは心強い」と期待している。



北海道弁の書かれたハネルを手に笑顔を見せる真柄秀明会長(右)ら「なまらいいでない会」の参加者